

いちじょうだにあさくらしいせき
9 一乗谷朝倉氏遺跡(第154次)

所在地：福井市城戸ノ内町

調査原因：環境整備に伴う事前調査

調査期間：令和3年9月～11月

調査主体：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

調査面積：22 m²

時代：戦国時代



位置図 (S=1/50,000)

遺跡について 一乗谷朝倉氏遺跡は昭和42年に調査がはじまり、昭和46年に国の特別史跡に指定されました。以来、数多くの調査を重ね、令和3年の調査は第154次調査となりました。

今回の調査は、朝倉館跡北濠^{きたぼり}の崩落箇所について整備工事を行う前に戦国時代の遺構を確認し、今後の環境整備の基礎資料とする目的で調査を行いました。北濠を南北に横断する形でトレンチを設定し、掘削を行いました。調査箇所は第9次調査地点と第67次調査地点の中間に位置します(図1)。第67次調査では朝倉氏館北門の下(北濠の南側斜面)に石垣が確認されています。このような施設が延伸している可能性を考慮して調査を行いました。

主な遺構 濠の北斜面側は、一度園路として盛土されていますが、その下に近現代に構築されたコンクリート混じりのアゼが確認できました。その直下に戦国時代の整地層が確認できました。この高さから下には戦国時代の石垣が残存していることが判明しました。石垣は大型の石材が垂直に近い形で積み上げられており、最も大きな石材は横幅が1mを超える大きさがありました(写真1)。濠底まで掘削できませんでしたので正確な高さは不明です。第9・67次調査ともに北側斜面では石垣が確認されていません。第9次調査では濠内から転落石が多数出土したため、環境整備工事では復元的に石垣が整備されていますが、今回検出できた戦国期の石垣とは傾斜も積み方も異なります。今後の環境整備においてはこの石垣を参考に整備を行う必要があります。第67次調査で石垣が確認されていた南側斜面には石垣を確認できませんでした。

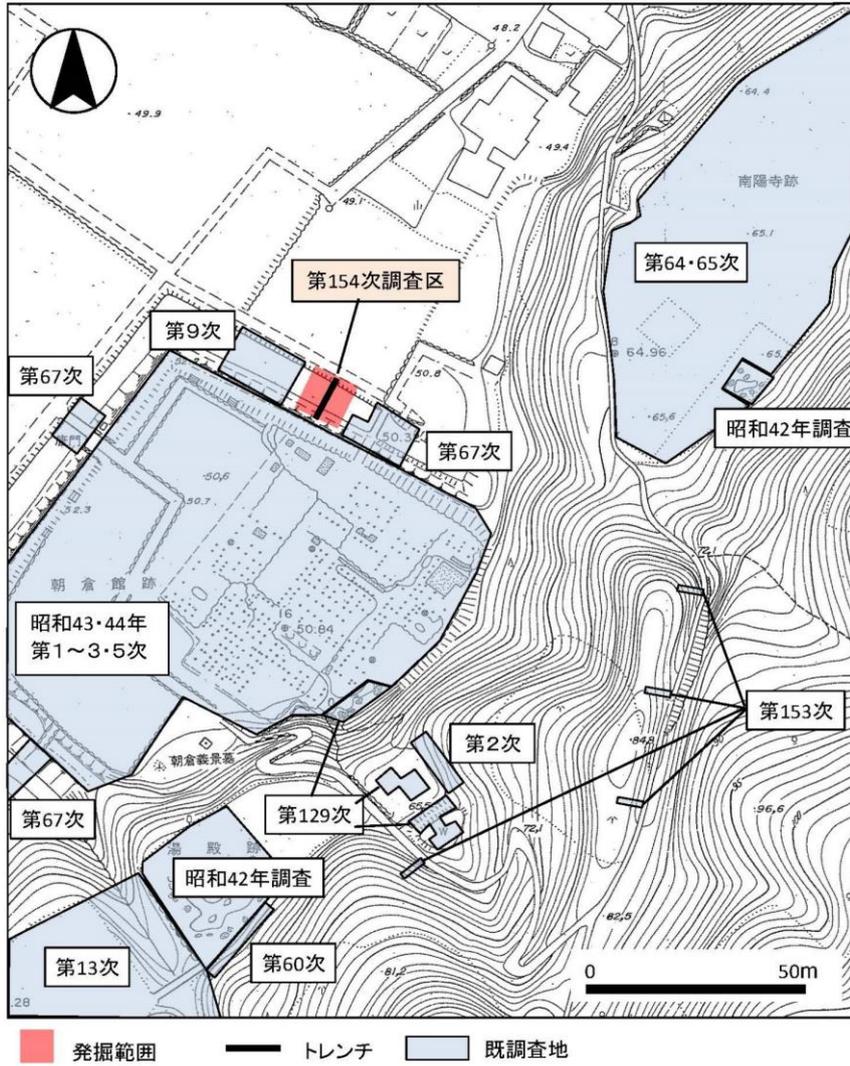


図1 第154次調査区位置図



写真1 第154次調査区全景（南より）

濠内部の土の堆積は掘りかえされた様子がなく、戦国時代に館が使用されていた期間においても徐々に埋まっていった様子が観察できました（写真2）。壁面の中央より下、黒く見える層位が戦国時代の堆積土になります。この上層が、館が焼け落ちた時期の層位と考えられます。炭化した木材、焼けた石なども出土しています。黒色層位の中央より下では、建築材加工の際に出た端材が大量に出土しています。館の建物増築に伴うものと考えられ、その時期が今後の検討課題となっています。

主な遺物 濠内からは、館で使用された後、廃棄された品々が多数出土しています。土器・陶磁器では圧倒的にかわらけの出土量が多くなっています。かわらけは非常にきれいな状態で出土しており、饗宴で盃として使用されたあと一度きりで打ち捨てられたものである様子がよくわかります。陶磁器は青磁や染付といった輸入陶磁器が出土していますが、破片ばかりでした。

もっとも出土量が多いのは木製品でした。折敷や曲げ物（写真3）、箸や漆器椀など食器や食膳具、下駄（写真4）などの木製品のほか、建築加工時の端材などが出土しています。端材は一部鑑定の結果、ケヤキであることが判明しています。

この他には、牡蠣などの貝殻、骨、種子など動植物の残滓も出土しました。

木製品や動植物残滓は鑑定も含め、多角的な分析を行いその実態を解明していく必要があります。

足利義昭を迎えるなど、幾多の饗宴が行われた朝倉館跡は、わずかな発掘面積にもかかわらず、その豊富な出土品から当時の繁栄ぶりがうかがえます。

一乗谷朝倉氏遺跡資料館は、令和4年10月に「一乗谷朝倉氏遺跡博物館」として開館いたします。遺跡のゲートウェイとして、また遺跡の理解をより深められる博物館となるように努めてまいります。今回の発掘場所である朝倉館、遺跡と博物館で両方見学してみませんか？それが可能な博物館です。

（宮崎 認）



写真2 濠内の堆積の様子（西より）



写真3 小型曲げ物と板材

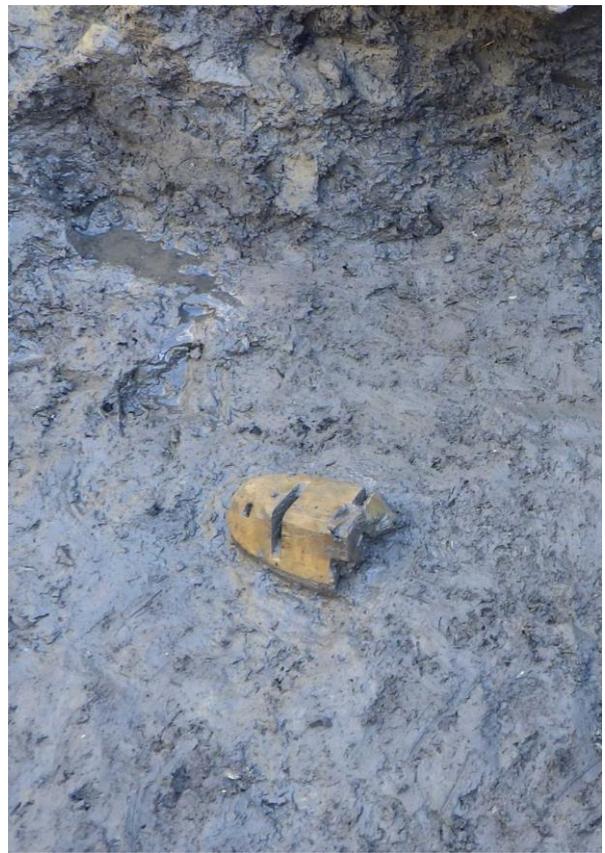


写真4 下駄